

# 屏風岩を中心として

石岡繁雄

## 一、屏風岩の概略

一般に穂高屏風岩といわれている岩場は、前穂高から東北に派生する北尾根の末端が横尾谷に切れ落ちてゐる帯広い部分を指している。

これは岩壁にくいこんだ数本の急峻なルンゼと、その間の岩壁とに分類される。それらは梓川寄りから第一ルンゼ（アルファルンゼ）、屏風岩正面岩壁、第二ルンゼ（ベータルンゼ）、名称のない広大な岩壁、第三ルンゼ（ガンマ

ルンゼ）、第四ルンゼと呼ばれている。

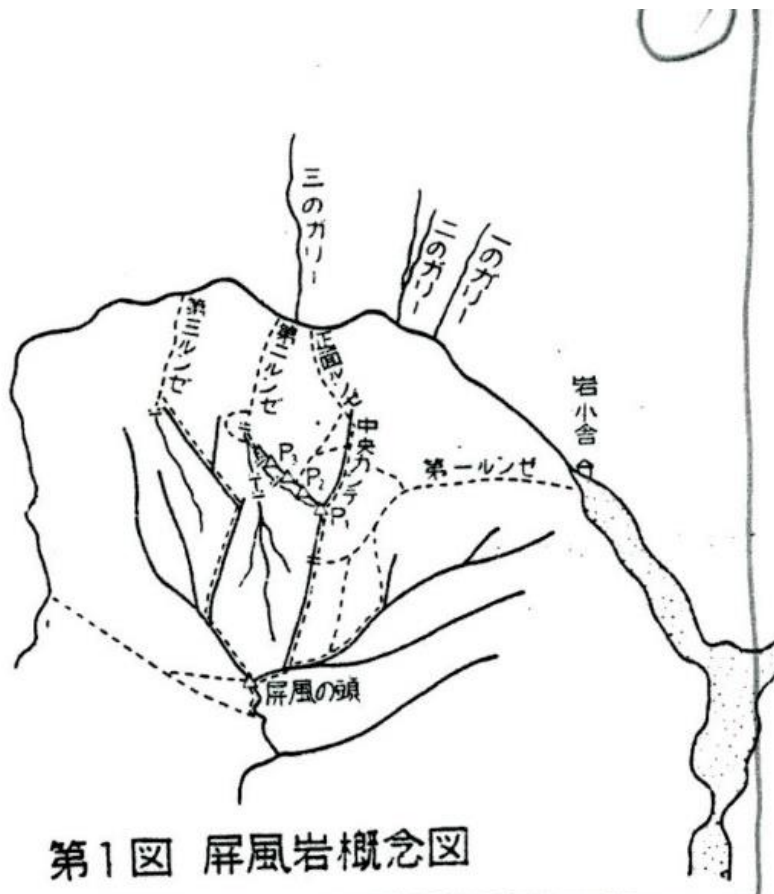
屏風岩の岩場がもつ一般的な特徴は、(1) 岩は堅く、穂高の他の岩場に比して落石が少い。他方、逆層が多く、リスが少なく、ハーケンが打ちにくい。(2) ルンゼにはブッシュはないが、岩壁には強固なブッシュがある。(3) 穂高の他の岩場に比し高度が低いため、雪が少く、夏雪溪を楽しむという利点がない。などであろう。岩場の程度は、そのほとんどのルートは困難な部

類に属し、他の岩場を一応終了して、ルート選定眼、軽快なバランス、ハーケン技術などをマスターした人々が訪れるところであろう。また登撃を終わってからのブッシュが猛烈であるので、他の岩場に比し相当な体力を要求され、ピヴァークも一応覚悟しておかねばならない。

根拠地は横尾岩でテントをはるのが最適で、水は豊富、薪木も豊富、風は吹かないし、至極のんびりしている。そのほか、横尾岩小舎、松高岩小舎もよいが、松高岩小舎（第一ルンゼの出合、右岸）は極めて小さく、横尾岩小舎は先客の心配があるのと、すぐ鼻の先をぞろぞろ人が歩くのでおちつかない。涸沢から往復してもそれほど損にはならない。

屏風岩を中心として  
日本山岳会監修  
登山全書  
P 登山全書

31年6月15日 河出書房発行  
より 拓刷



第1図 屏風岩概念図

## 二、第一ルンゼ

濁沢へいく横尾林道は、横尾岩小舎を経てから次々に巾四、五米のガリーを横ぎるが、このガリーを岩小舎に近い方から一のガリー

二のガリー、……と呼んでいる。第一ルンゼは一のガリーから最もよく眺められる。圧倒的な正面岩壁の左端にみえるS字状に曲った明るい感じのルンゼが、それである。このルンゼに入るには、岩小

舎の約百米下流にある巾約八米の、丸い花崗岩がごろごろした押出しを、約三十分つめればよい。夏でも大抵ルンゼの取付には雪が残っており、雪と岩との間にシュルンドができている、岩にとりつくのに非常に時間をくうことがある。

第一ルンゼは非常に登攀容易にみえるので、軽々しく取りついてしまいがちである。結果はたちまち動けなくなって、こんな入口でこんなことではどうなるかと完全に闘志をそがれてしまう。要は、右側のルンゼの中心をはなれ、左の一番やさしくみえる草付のリンネに取りつくことである。これから先はほとんど決定的で迷うことはない。約三ピッチでリンネから一たん右のルンゼの底へ出るがそれからはなるべく、ルンゼの底から離れないように登っていく。さらに三ピッチ位登ったところで、かなり大きなテラスに出る。後述の正面岩壁横断のルートは、ここから始まる。ちよつとのぞいてバンドの存在を確かめておくとよい。さて第一ルンゼはここから





しばらくは容易だが、S字状の上部の曲り目、いわゆる中段の台地に出る直下が悪い。チョックストーンは横にハーケンを一本打って、アンダーホールドで強引によじ登る。このあたりが第一ルンゼのク

ライマックスである。取付から中段台地までの所要時間は三時間から五時間位、途中で上ったり下ったりちよつともたついていると、七、八時間かかる。ここまであまりにも時間を費したと思つたならば、この先、左の尾根に逃げる。通常さらにルンゼに沿って登る。中途半端な傾斜で逆層のスラブがつづき、細かい砂が乗っていて気が持が良くない。ルンゼに忠実に沿って登ると、どんづまりの滝がある。ルートはこのほかに、そのちよつと手前から右の尾根左の尾根どちらにもとれる。どんづまりの滝は約十米で、上部がカブリ気味で登れず、右手の壁にとりついて登り、左にトラバースして滝の上に出る。この部分は非常に慎重を要するところで、第一ルンゼ中最

悪である。これをぬけ出たところは、屏風の頭と正面岩壁のP<sub>1</sub>いわゆる岩場の頭との間の小さなコルで、これから左へと登っていけば屏風の頭につく。

第一ルンゼは屏風岩のルート中、代表的のもので、明るい谷、固い岩、高度の技術、しかも困難な部分が比較的長く、内容の充実した岩登りができる。登攀には快晴の日を選ぶべきであるが、万一途中で降られて進退きわまつたならば、前述の東壁横断ルートへ出ればよい。

### 三、正面岩壁の概略

第一ルンゼと第二ルンゼとの間に挟まれた高さ約六百米、巾約千米の岩壁で、日本最大の絶壁といわれ、その威圧的な風貌とともに、

人々に恐怖の壁という印象を与えてきたものである。正面岩壁はさらに各々特徴をもった三つの壁に分けることができる。S字状に曲った第一ルンゼに接して向って右側へ展開している岩壁を東壁と呼び、東壁に続いてその右側に並ぶ岩壁を中央壁と称している。東壁と中央壁とは約百二十度の角度で折れ曲っているが、横尾の岩小舎からみたのでは、正面から望むことになると区別がつかない。しかし三のガリーからみると、中央壁だけがみえて東壁がかくれてしまふので、その境の線（東稜）がはっきり浮き出して見える。この中央壁と東壁とが、姿見を立てかけたようにすすべの大岩壁となつてそそり立ち、かつて登攀不能の壁として最後までとり残され

たのである。次に岩小舎あるいは上高地から槍ヶ岳への登山路から眺めたのでは中央壁の裏になつて見えないが、横尾林道を一のガリーから三のガリーへと進んでいくと、中央壁の右に続いてさらに岩壁が現われてくる。これを北壁と呼んでいる。中央壁と北壁とは約百度の角度で折れ曲っている。この境を中央稜（または中央カンテ）と呼んでいる。北壁は右へ移るにしたがつて次第に低くなり、遂に無くなってしまう。また北壁は東壁や中央壁のようにすすべした感じはなく、地形が複雑で、二本の大きな溝（中央稜寄りから第一岩溝、第二岩溝と呼んでいる）を持つている。なお、北壁のさらに右は深く切れこんで第二ルンゼとなつており、その境は細い稜線

（慶応稜）ができている。

岩壁は、ブッシュのついた部分と、岩の露出した部分とでできており、ブッシュの部分は萌黄色の所が部分的にあり、残りは濃い緑色である。これは東壁で少なく、中央壁でやや多く、北壁側へ廻りこむと半分以上濃い緑色でおおわれている。萌黄色は雑草であり、十数坪にわたって黄色いゆりの花が一面咲いている所もある。これに反して濃い緑色の部分は、相当に太い灌木が密生している。一方岩壁の傾斜は垂直に近く、またいたる所にオーバーハングが望まれる。今これらの岩壁にはAフェース、Bフェース、……灌木地帯にはB<sub>1</sub>ブッシュ、B<sub>2</sub>ブッシュ、……草の生えている部分およびちよつとした棚になつた所にはT<sub>1</sub>テラス、



T<sub>2</sub>テラス、……の名称をつけると第三図に示すようになる(これには北壁はあらわれていない)。灌木地帯に生えている灌木の大きさは、たとえばB<sub>10</sub>ブッシュでは腕程の太さの灌木が多く、中には径二十種位の岳樺も交っている、もちろん機械体操しようともびくともしないものである。とくにT<sub>2</sub>テラスには太い三本の白樺が生えているのが一のガリーから肉眼で見えるB<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>、B<sub>6</sub>ブッシュなどでは、太さ三種位のもが多く、手掛、足場にはなるが、必ずしも安全とはいえない。テラスの草は、岩登りの助けにはほとんどならない。一方岩壁には亀裂なく凹凸もほとんどなく、いずれも登攀不可能に近いものばかりである。

正面岩壁の登攀に関して重要な

ことは、このような灌木があつてすべにみえる岩壁に生えているということである。このため中央壁の登攀も可能となつたわけである。しかしいかに屏風岩の規模が大きいかということを示すこともなる。

なお、地形を観察するのに次のことは誤り易いことである。すなわち天幕地(岩小舎から約百米下流の河原)からはほとんど見えないうが、わずかに岩小舎からは中央稜の中程に人間の鼻にも似た凄いオーバーハングが目につく。これは一のガリーまでいけばもう判別がつかなくなる。このオーバーハングは慶応稜上のP<sub>3</sub>ピークであつて、決して中央稜にあるのではない。すなわちこの部分が慶応稜の中でとくに突き出ているため、天

幕地ではほとんど見えないものが、岩小舎へいくと見えるようになるのである。屏風にうすぐガスがかつた時には、このことがじつによくわかる。T<sub>0</sub>テラスから見上げると、中央稜とこのオーバーハングとの間に巾の広い岩溝が二本も存在していることがわかる。岩小舎から見るとDフェースの上はこのオーバーハングが重つて見えるので、Dフェースは凄いと考へ、またDフェースにはブッシュがついているような錯覚を持つことになる。とにかくこのオーバーハングは見る人をして一層正面岩壁を不可能なものに印象づけていたであらう。

次に一のガリーあるいは岩小舎附近から眺めた場合、岩場の頭P<sub>1</sub>の位置を誤りやすいことである。

このことは四のガリーで眺める  
とき、横尾谷を渡り中央壁の直下  
に近づく時、あるいはP<sub>1</sub>に立って  
観察するとき明瞭となる。中央壁  
は上部で非常に狭くバットレス状  
をなして突き出し、下に移るにし  
たがって広くなっている。したが  
って東壁はP<sub>1</sub>と屏風の頭との間の  
壁ということになる。

#### 四、正面岩壁横断ルート

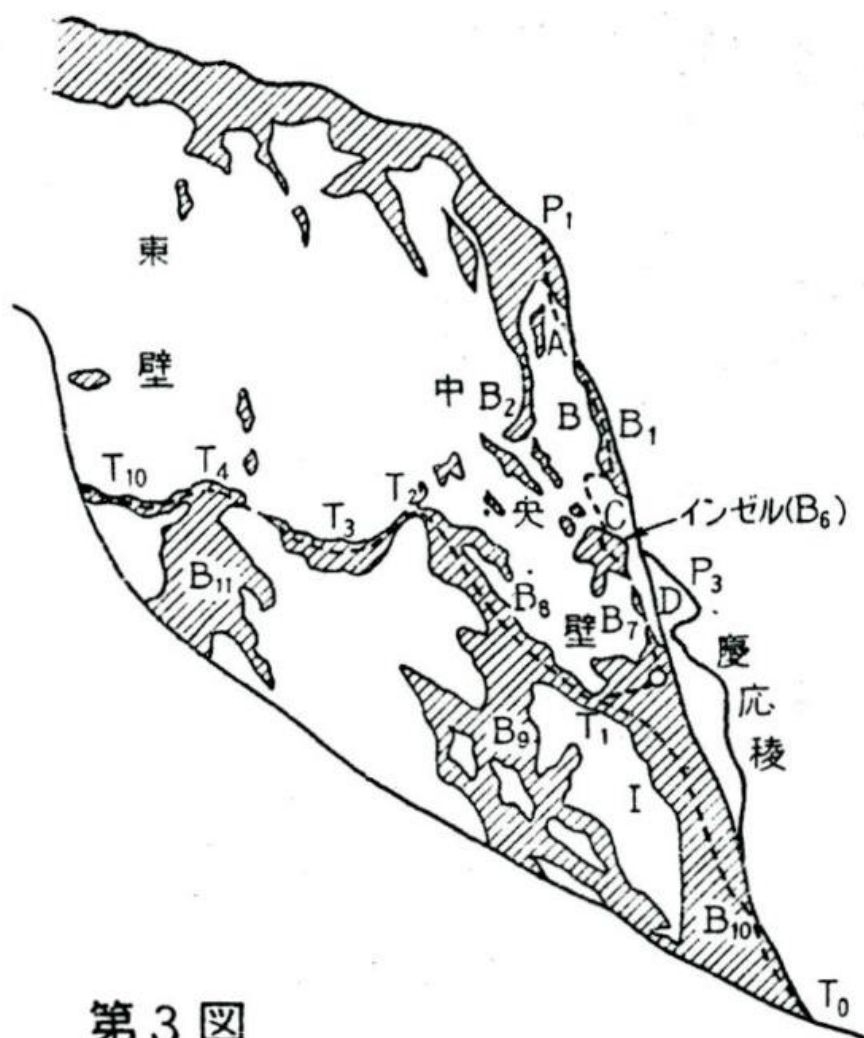
横断ルートは、第一ルンゼの項  
で述べたように、第一ルンゼの約  
三分の一の高さの所が出发点とな  
り、慶応稜P<sub>3</sub>に終るルートであ  
る。まず出发点から、東壁をほぼ  
水平に横切る細々した草のテラス  
にふみこむ。このテラスは岩小舎  
からでも一のガリーからでもはっ  
きりわかる。テラスは巾約三十糎

前後の、灌木の殆んどない草のテ  
ラスで、感じはよくないが困難な  
ルートではない。ただ注意すべき  
点は、この草のバンドは中央より  
も第一ルンゼに近い部分で非常に  
細くなっている。この部分は、頭  
上の岩壁がかぶさっていて感じが  
よくない。身体の右半分を空中に  
出して、草の根にしがみついては  
っていくのだが、への字になって  
いるので、登りはまだよいが、下  
りは頭を下にして下りていかねば  
ならないので、憂うつである。し  
かしこの草のバンドの約三米下に  
斜に傾いた岩のバンドがあるか  
ら、これに下りれば簡単である。  
T<sub>4</sub>テラスは巨木が生えており、テ  
ラントでも張れる場所である。次い  
でT<sub>3</sub>テラスは長さ約二十米、巾十  
米の五十糎位の雑草が一面に生え

た外部に傾いた草のテラスであ  
る。T<sub>2</sub>テラスには前述のごとく、  
白樺の巨木が生えている。T<sub>3</sub>テラ  
スとの間には、巾約五十糎、高さ  
約十米の登攀容易なチムニーが入  
っている。B<sub>8</sub>ブッシュは屏風岩と  
は思われない灌木地帯であり、そ  
れの終る所が黄色い花の咲いてい  
るT<sub>1</sub>テラス（八高テラス）となっ  
ている。T<sub>1</sub>テラスは傾斜約三十度  
位の巾三米、長さ五米の草のテラ  
スであるが、坐っていても安定感  
がない。T<sub>1</sub>テラスからP<sub>3</sub>までは後  
述するが、横断ルートをここまで  
で止めて、ここから下ることによ  
れば、岩小舎からの一周で五時間  
位であろう。

このルートには第一ルンゼの快  
適な岩登り東壁トラバースの緊  
張、尅大な正面岩壁の偉観などが





第3図  
横尾岩小舎から眺めた屏風岩

(正面岩壁横断と中央カシテのルートを示す)  
○印は目印の白樺、斜線の部分はブッシュ

合まれ、灌木地帯のわずらわしさも少く、時間も比較的短時間で中級程度の岩登りコースとして推奨に値すると思う。しかしこの逆コ

ースは、第一ルンゼが下降になるだけに容易ではないと思う。第一ルンゼの項で述べたように、第一ルンゼが登れなくなった時の逃げ

道として記憶しておくといよい。

### 五、中央カシテのルート

横尾林道を離れ三のガリーを下って対岸に移り(増水している場合は、架橋または本谷の橋から下らねばならない)約三十米下って、巾約二米の細い正面ルンゼの押し出しを登りつめると、正面岩壁の中央稜から少し北壁に寄った部分に達する。ここからブッシュを求めて、左上に登って展望のよいT<sub>0</sub>テラス(取付テラス)に達し、さらにB<sub>10</sub>ブッシュに入り、このブッシュを登る。左方に注意して時々Iフェースを眺めるようにすれば、間違はなくT<sub>1</sub>テラスに達する。岩小舎から約二時間を要する。次にT<sub>1</sub>テラスから右へ水平に約三十米トラバースすると、一の

ガリーからでも、T<sub>1</sub>テラスからでも見える径二十糎位の白樺が一本灌木の中に立っている場所へ出る(第三図の目印の白樺)。この白樺の所へ達したならば約三米T<sub>1</sub>テラスの方へ戻って、ここから約二十米最大傾斜に沿って登ると、傾斜がさらに急になってバンドのようになつた所へ出る。このあたりが中央稜である。ここからさらに直登すれば一列の疎なブッシュに入ることが出来る。B<sub>7</sub>ブッシュ、B<sub>10</sub>ブッシュ間の壁は約五米で、深さ一糎、巾約五糎の溝が斜の左上にのびている。この溝から手をのばしてB<sub>7</sub>ブッシュにある灌木を左手で握り、これに体重をうつしてブッシュの上へ出る。B<sub>7</sub>ブッシュ、インゼル間の壁は約五米であるが手掛、足場が少く、普通では登れ

ないかもしれない。初登の際、手掛、足場をハンマーでうがって作るというあまりスポーツらしくない方法をを用い、約六時間を要して登つた。インゼル、B<sub>1</sub>ブッシュ間のCフェースは、このルート中最悪で、途中に生えた小さなブッシュに投縄し、約六時間半を費した。しかしこのブッシュは、その時折れてしまつたので今後使えるかどうかは疑問である。インゼルからB<sub>2</sub>ブッシュへうつるルートは、探せばありそうな気がする。

Aフェースは、下部の約八米のオーバーハングは投縄でこした。中程から左Bフェースの上へとトラベースする所が苦しい。その上の赤褐色の岩には耳のような岩がつき出ているが、ザイルがその間にくいこんで動かなくなる心配がある。このルートで、トップがここを通過するときには注意せねばならぬ。高度感には圧倒的である。他に比較するものがないから、空中にいるような気がする。要するに困難なルートである。

### 六、北壁のルート

北壁登攀のルートは正面ルンゼの押し出しを登って岩壁に達し、これを右上に岩の割れ目を求めて登り(第二図の①)高さ約五米のオーバーハングのバンドの左端をよじ登り、第一岩溝、第二岩溝間の尾根を登り、次いで第二岩溝に入り、北稜上のP<sub>3</sub>の頭に達するのである。オーバーハングの通過には、ハーケンを使用して吊り上げをせねばならない。なお下半部のルートをB<sub>10</sub>ブッシュに取り、目





印の白樺③から右に水平にトラバースして前記のルートに入るルートを取れば、灌木の連続であり、ハーケンの必要はない。

このルートについてやや詳述する。目印の白樺からほとんど水平に右へトラバースする。もちろん猛烈なブッシュの中であるが、傾斜はほぼ垂直であり、ところどころ壁がかくれているので、いく分上下して壁をさけつつトラバースする。約三十米で傾斜はゆるくなり、何となくのんびりした所へ出る。ここが第一岩溝である。ここから左上を眺めると、Dフェースのすべすべの壁が眺められる。ここからさらに右上にルートをとり、ちよつとリッジのような所へ出る。ここから右には大きな壁があるので、このリッジに沿って登

る。このあたり、まもなく傾斜が急になってブッシュの中に壁がカシテ状にかぶり気味に出てくる。壁に平行に生えたブッシュを足場にして登ると、ここで初めてブッシュが切れる。ここに初登の際のハーケンが打ってある。このハーケンをみつけたならば、ここから右下に下り、ややかぶり気味の壁の下にある長さ約五米の草のバンドにのる。ズリ足でバンドを右に横断すれば、傾斜のぐつとゆるくなつた場所へ出る。ブッシュの密生した斜面を右上にあがると、バツと視界が開けてP<sub>3</sub>（巨大なオーバーハング）の上へ出る。右は第二ルンゼとなつてガクンと切れている。P<sub>3</sub>からは慶応稜を登つてP<sub>1</sub>（岩場の頭）に出る。途中、P<sub>2</sub>から眺めるAフェースのプロファイルは

印象的である。ルートさえ間違えなければ、岩小舎から三時間乃至四時間でP<sub>1</sub>に達する。なお、目印のため鋸でブッシュを切りつつ登つたことがあり、また相当数のパーティが登降しているので、ルートは大低みわけがつくと思う。このルートは下降ルートとしても容易で、P<sub>3</sub>から右下へ右下へと足もとをのぞき、ブッシュの続いているのをたしかめて下れば比較的容易に下れる。ルートを間違えても懸垂すればよいわけだが、大よそ先の見通しをつけておかねばならない。

実際岩場の頭から普通踏まれるように屏風の頭を越して涸沢道に下るよりも、遙かに短時間でかつ労力少く岩小舎へ戻ることができるのである。今後ともこのルートは屏風のもつ独特な味を楽しもうとする人々によって、ますます盛んに登降せられるようになるであろう。